ずいひつ

「ベルリン森鷗外記念館一瞥」

結核予防会新山手病院院長
長田　功

かなりの歳月に耐えた石造のアパートの表通用口に，森鷗外記念館の標札がかかっていた。内に入って階段を2階に昇ると，そのつきあたりに部屋のドアがあり，「ご用のかたはブザーをどうぞ」と日本語の貼り紙掲示があった。ブザーに応えてドアが開いた。中年の知的なドイツ婦人がにこやかに対応に出てこられた。

「Guten Tag, ich komme aus Japan」と挨拶すると，無理なドイツ語は無用と「日本の方ですね，ようこそ」と美事な日本語で招じ入れてくれた。この数日，ドイツ国内の街角や駅で，一句でもドイツ語を発するや否や，こちらの語学力などお構いなくドイツ語の嵐が襲ってきて，辟易していたのであるが，やっと言葉の桎梏から解放されたと思うと急に気が楽になった。時刻はすでに4時半を廻っており，閉館時刻2時（あとで知った）を大巾に過ぎての突然の非礼な訪問であったが，こころよく迎えて下さり誠に恐縮するより他なかった。刺を通じると女史の名前はベアーテ･ウェーバー（Beate Weber）さんで，ベルリン・フンボルト大学日本学科研究センターの研究員であり（この施設は，同センターとベルリン市が管理している），鷗外と日本文化を研究されている由である。記念館内には，鷗外が下宿した当時の部屋が復元されており（天井，窓，床は当時のそのもの），ベッドや机など調度品は同時代のものをわざわざ揃えており，在独中450冊読んだと云うドイツ語の原書もその一部を当時の版本で書棚に陳列している。他の部屋には，一万冊にも上る鷗外の全集や研究書及び日本文化一般の研究書を備えた図書室や，鷗外の生い立ちや家族を示す写真パネル，原稿などの鷗外研究に欠かせない資料やデスマスク（複製）を展示した部屋などがあった。また，戦前ドイツに留学した日本人の名簿が整理されており，一見しただけで，あちこちに知名の名前を見出すことができたのは楽しかった。

森鷗外林太郎は，明治14年（1881年）に東大医学部を卒業，直ちに陸軍軍医となり，明治17年（1884年）念願のドイツに留学，5年間弱在独した。ライプツィヒ，ミュンヘン，ドレスデンに滞在したあと，最後に1887年ベルリンに着任，その最初の下宿がこのアパート（マリエ街32）であった。先の大戦で熾烈を極めたベルリン市街戦の真只中にあって，この建物が戦禍を免れたのは奇跡と云うより他ない。鷗外はベルリンでの留学生活を題材とし「舞姫」を書いたことはよく知られている。「舞姫」にはこの下宿をモデルにした描写がよくでてくる。

もっともこの下宿での生活は2ヵ月間だけで，他処に移っている。「独逸日記」に，この下宿についての不満が記されている。「且（しばし）十七歳のトルウデル（嬢）夜我室を訪ひ，臥床に踞して談話する抔（など），面白からず」と女主人と娘の無作法を難じている。復元とは云え，当時の部屋模様をみていると，まさに「詩と真実」の間に，想念が揺れ動くのを禁じえないのであった。私以外は誰もいない深閑とした館内を，自由に一通り参観させて貰ったあと，女史と鷗外と日本文化について，しばらく話をした。

女史の懸念の一つは，現在の日本人が，森鷗外をどうとらえているかと云うことであった。女史は研究の必要から，現在の日本の小説家や文芸評論家に会う機会が時々ある由であるが，鷗外について訊ねると「鷗外は私には一寸…」と云う具合に反応が薄く，何か敬遠している雰囲気を感じることが少なくないとのことであった。かえりみて私が学生の頃は，佐藤春夫，石川淳，中野重治などの文壇一流の人士が，鷗外の専著をもっていて，私なども蒙を啓かされたのを想い出した。私は考える。一時的にこうした現象があるとしても，鷗外の偉大さは減じるものではないと。鷗外によって，ゲーテ「ファウスト」の有名なマルガレーテの歌「Es war ein König in Thule」を「昔ツーレに王ありき」といとも簡明にさりげなく訳されてしまったために，後の世のファウストの翻訳はこの行について云えばすべて色褪せざるを得ないことに見られるように，鷗外の物事の把握，理解力は絶大で，さてこそヨーロッパ文明，思想の導入の旗手となったのではないか。こうした基盤なくしては，真の日独文化交流は危ういのではないかと私は信じている。

むしろ，私がヨーロッパ人としての女史に聞きたかったのは，鷗外の作品中で重要な部分を占める史伝の中で，「渋江抽斎」における「五百（いほ）」，「安井夫人」における「佐代（さよ）」のように，封建時代の世の女性を精神の自立した人間として美事に活写している鷗外の描写力は，ヨーロッパ思想を踏むことなくしては難しかったのではあるまいかと云うことである。

すでに時間は尽きてきていた。非礼を詫びて辞去し，鷗外も幾度も歩いたウンター・デン・リンデン通りへの道を辿り，シュプレー河にかかるマーシャル橋を渡るとき，2月の凍結した河面からの風は冷たく，顔面を容赦なくたたいた。明治開国から未だ20年に満たないこの時代，まさに東路（あずまじ）の果てから遠来した若き鷗外には，この冷たさをいかが感じたことであろうかと感慨なきに非らずであった。街はとっぷりと暮れて，改修新装なったReichstag（国会議事堂）が明るく輝いていた。